# BL ジャンルの根本問題：「なぜ、男性同性愛なのか？」
## ―― 変身願望と対象関係論の視点から ――

打田 素之
神戸松蔭女子学院大学文学部
**Author's E-mail Address:** jol2017uchida@gmail.com

---

# The Fundamental Question in the Boys' Love Genre: Why do female readers prefer stories with male homosexual couples ? — From the Point of View of the Masquerade and the Object Relations Theory —

**UCHIDA Motoyuki**
Faculty of the Letters, Kobe Shoin Women's University

**Abstract**

Boys Love をテーマとするマンガは、過激な性行為を描きながらも、男性向け成人マンガとは明らかな相違を見せる。性行為の場面において、男性向けマンガが常に女性の裸を提示することに専心するのに対して、BL ジャンルは〈受け〉と〈攻め〉の両方の身体を描写する。これは女性が両者に感情移入可能な性であるばかりでなく、〈攻め〉＝男性としてふるまいたいという欲望を持っていることも示している（ファルス願望）。この欲望は、精神分析学的には、〈父〉の登場によって母の独占を禁じられた女児が、父に「変身」することによって、父が母を所有していたように母を得ようとしているのだと考えられる。しかし、母と同じ性である彼女にそれがかなうはずがない（＝彼女がまとっている父の性は「仮装 masquerade」でしかない）。そこで、娘は性的体制が確立する以前（＝前エディプス期）の母との関係の回復を目指す。そうすることで、彼女は母との合一を果たし、性器体制の外にある愛を成就しようとする。ここに BL ジャンルが同性愛をテーマとした理由がある。女性達は、ファルス願望の実現を通して、実は「非性」という「同性愛 homosexual」の物語を楽しんでいるのである。

The Manga of Boys' Love, which appeared in the 1990s in Japan, always tells us the story of

*Journal of the Faculty of Letters, Kobe Shoin Women's University*, No. 8（March 2019）, *31–42*.
神戸松蔭女子学院大学研究紀要文学部篇 No. 8（2019 年 3 月）, *31–42*.

the homosexual male couple, though the readers are always girls and women like Slash fiction in America and Europe.

They enjoy the love story metamorphosing themselves into the man ; it is not difficult to see here "the penis envy" from psychoanalysis. The girls who want to love their mother as their father does develop penis envy after they find that they don't have one ; the Freudian theory says that, once they know that they cannot get one, they change the object of love from their mother to their father, but in our thoughts, they haven't given up loving their mother ; they try to keep the love by masquerading as a father, that is to say the "phallus" (Lacan).

On the other hand, based upon the object relations theory (Fairbairn), their love is not sexual because they want the baby-mother relationship from before the Father's entrance in their life. We can point out here the double binded female desire : to be male and at the same time to get the non-heterosexual love. To satisfy this desire, the story of which girls and women are fond must describe homosexual male love.

キーワード：ペニス羨望、ファルス、母子、エディプス・コンプレックス、フェアベーン
Key Words: penis envy, phallus, mother-baby, Oedipus complex, Fairbirn

女性が、なぜ男性同性愛の物語を消費するのか、という問題は、80 年代後半から研究者の関心を引き、いわゆる本格的な BL ものが登場する以前は、「美少年」ものとして論じられてきた。曰く、「受け入れがたい現実から自己を切断するため」に、そして「性という危険物を自分の身体から切り離」すために、少女たちは「美少年マンガによって、「少女」でも「少年」でもない「もう一つの性」を創造した」（上野 1989：245）。あるいは、「少女にとって性はまず " 恐れ " であり、欲望ではない」（藤本 1990：191）のだから、異性愛を土台とした恋愛物語には、常にこの恐怖が付きまとうため、少女マンガは少年愛を選択した、と主張されていた。90 年代前半のフェミニズム運動に連動して、女性たちが経験した第 2 次の〈性の解放〉を、「より内的な欲求に根ざした官能としての性の追求」であったとする山田田鶴子も、「ホモセクシュアルな少年同士の愛を描いた異次元空間では、性の一線を容易に乗り越えることができた」と言う（山田 2007：104）。こうした言説は、確かに少女マンガが対象とされている限りでは間違っていないのだが、90 年代にリアルな性行為の描写をもった BL ジャンルが登場するに及んで [1]、もはや男性同性愛が、「ジェンダー的抑圧という拘束具」（藤本 2007：46）からの解放という理由だけでは説明できないものがあるように思われる。

なぜ、女性たちはレズビアニズムでもなく、ヘテロでもないジャンルの恋愛物語を選んだのか。この問題は、また、男性が少年マンガのレベルにおいても、アダルト・コミックのジャンルにおいても、女性同性愛の物語を消費しないのか、という問題と裏腹の関係にあるように思われる。そこで、私たちは、まず、マンガというジャンルにおいて、男女の性差がどのように現れているか、からこの問題を考えて行きたい。

## 1. ポルノコミックに見る性差

マンガは、他の文芸ジャンルとは異なって、消費者の性別によってはっきりと表現方法に差異が見られるジャンルである[2)]。少年マンガと少女マンガを見比べればすぐにわかることだが、一般に少年マンガが、①背景を丁寧に描き、②コマとコマの間にある間白を尊重し[3)]、③モノローグがあまり使用されないという傾向があるのに対して[4)]、少女マンガはこれとは全く逆の描き方をする。こうした傾向は、今回問題とする成人向けマンガにもそのまま踏襲されているが、BL マンガ、レディースコミックと男性向けのポルノコミックの間には、これら以外にも大きな違いがある。それは、特に性行為のシーンに際立って見られる。「マンガにみるセクシュアリティの差異」を研究した堀あきこの『欲望のコード』に拠れば、

> 男性向けポルノグラフィと〈性的表現を含む女性向けコミック〉の最大の差異は、男性向けでは性的欲望の対象となる女性身体が描かれるが、女性向けでは男性身体に視線が向かわず、女性身体が描かれる点にある（堀 2009：38）

と言う。男性向けポルノグラフィが、マンガに限らず AV であろうがアニメであろうが、常に女性の身体＝裸を映し出すことを中心に映像作りがなされるのに対して、女性向けポルノでは、女性の身体と同時に男性の身体も同時に映し出され、なおかつそれを読む＝観る読者の視線は、男の体に向かうのではなく、裸の女性に向かっているというのだ。こうした現象を説明して、堀は、「受けと攻めの身体と表情が同程度に描かれている」ことは、受け・攻めの両方を「俯瞰する視線」があるからにほかならず（同前：184）、読者の「どちらも見たい」、「どちらにも感情移入したい」という欲望を表しているのだと言う。これは永久保陽子のヤオイ小説の定義とも一致する。永久保に拠れば、

> 〈やおい小説〉とは、性差に象徴される異質性を、娯楽として楽しむことを志向するテクスト（永久保 2005：103）

である。読者は〈やおい小説〉の出現によって、「初めてジェンダーを“男らしさ”と“女らしさ”をロールとして、抑圧を排除して楽しむことが可能となった」とされる（同前）。すなわち、女性たちは、男性同性愛の物語を通して、女であり、同時にまた男でもあるという「複数の役割を同時に」楽しんでいるのだと考えられる。これは、少女向けサブカルチャーのジャンルにおいては、普通に観察される現象である。

## 2. 女性性と変身願望

「複数の役割の共存」は、サブカルチャーも含んだ物語の世界では、「継起的に次々と役割を変えていく」パターンとして現れている。いわゆる変身もの、変身譚はこの世にあまた存在して来たが、変身シーンを映像として見ることができるようになって以降のものを対象に

考えた場合、すぐに気づくことは、少年を対象とした変身もののヒーローは、基本的にアイデンティティが単一であるのに対して、女子を対象とした変身譚は、変身に最終形態が存在するとはいえ、何になるかではなく、「そこに至るまでの過程自体」が重視されるということである。もちろん、90 年代以降に現れた少年もののヒーローは、次々と変態を繰り返すことによって、最強の身体に至るケースが多い（たとえば、『ドラゴンボール』）が、そのアイデンティティは全く変化することはない。彼らの目的はただ一つ、「強くなること」だけである。

これに対して、女子を対象とした物語では、変身をすること自体が重要視される。『ひみつのアッコちゃん』（初出、1964 年）を経て、古くは『リボンの騎士』（初出、1952 年）にまで遡ることができるのであろうが、1993 年に登場した『セーラームーン』はその典型と考えられる。ヒロインはクライマックスで敵と戦う際に、変身の最終形態をとるが、物語の重点は敵である妖魔との戦いにはない。多くの少女たちを惹きつけたのは、そこに至るまでのヒロインの変身譚であると考えられる。敵の情勢を探るために、主人公のうさぎはある時はケーキ屋さんに、ある時は女子アナに、またある時は CA へと変身している。これが、アッコちゃんにおける魔法のコンパクトによる変身を踏襲していることは明らかであろう。もちろん、少年もののヒーローも作戦上、何者かに変装することはあるが、それはあくまでも「変装」であって、変身ではない。

フェミニストで映画研究者のメアリー・アン・ドーンは、映画の女性登場人物と女性観客を論じた文章の中で、女性性の本質は「仮装 masquerade」にあり、女性の「アイデンティティの不在」を隠す手段であると言う。

> 仮装は女性性そのもので、それは仮面（mask）であり、装飾の層として構成され、アイデンティティの不在を隠蔽している（Doane1991：25）。

「アイデンティティの不在を隠蔽している」という表現は、「女なるものは存在しない」（ラカン 1985：112）としたラカンの発言と関連しており、その意味は、「〈女〉そのものを表すいかなるシニフィアン（＝記号表現）も、あるいはその本質もないということである」（フィンク 2013：167）。言い換えるなら、「アイデンティティの不在」こそが女性性の本質と言うことになろうか。ラカンは、別のところ（「ファルスの意味作用」1958）で「女性が欲望され愛されることを意図するのは、自分でないもののためである」と述べている（Lacan 1966：694）。

日本のマンガやアニメにおける変身シーンは、女性性を定義するのにさらに興味深い例を提供してくれる。今や YouTube の存在によって、ヒーロー、ヒロインがどのように変身するかは容易に確認することができるが、少年ものと少女向けでは、明らかに変身シーン自体に大きな差異が認められる。少年もののヒーローが 10 秒足らずで、アッという間に変身してしまうのに対して、美少女戦闘物（たとえば、プリキュア・シリーズ）のヒロインは変身に非常に時間がかかっている（30 秒～ 1 分、長い場合は 2 分近くになることもある）。この違いは何を意味するのか。答えは簡単である。少年変身ものにおいては、変身の過程など大して

重要ではなく、変身後の「戦い」こそが重要であるため、「変身」自体は簡単に済ませられるということである。それに対して、少女たちの関心は「戦い」にはない。「変身すること」自体が問題なのだ。だから、戦闘ヒロインは最終形態となる前に華麗なる変貌のシーンをじっくりと見せてくれる。完成形に至るまでに彼女達が次々と装飾品をまとう様子は陶酔感と共に演出され、その後の戦いなど二の次といった感がある[5)]。

では、なぜ女性たちはこれほどまでに「変身」を望むのか。それは、BL ジャンルの描写方法に見られる性差が教えてくれる。

## 3. ペニス羨望と BL

堀と同じく、BL マンガの性差の問題を表現方法の観点から追及した守如子（なおこ）は『女はポルノを読む』の中で、レディースコミックやハードな BL などの女性向けポルノが、「受けの顔だけでなく、攻めの顔も描写する割合が高い」（守 2010：160）と言う。それは、

> 攻めの側の変化の様子を作品に描くことによって、受けの攻め性を示すと同時に、読者に攻めの受け性を味わわせている。（同前：161）。

つまり、攻められる受けの快楽を描くだけではなく、攻めを受けることによって、受けは実は攻めを攻めているのであり、受けの〈受動攻め〉の快感を読者に提供しているというのである。レディース・ポルノには受け（＝女性）の攻め性が潜んでいるというのだ。先の堀も、「ヤオイコミックのセックスシーンは、「受け」［の］身体と性的快楽だけが描かれるのではなく、「攻め」の身体と性的快楽も描かれることに特徴がある」（堀 2009：184）と指摘している。両者の分析から、見えてくることは、BL を含めた女性向けポルノには、女性が持つ〈攻め〉としての欲望を充たす仕掛けが施されているということである。

ヤオイ・マンガの実作者でもある野火ノビタは、「やおい」をめぐるインタビューに答えて、次のように言っている。

> 抱きたいのか、抱かれたいのか。どちらに感情移入できるかというと、答は両方だと思うんです。抱きたいという気持ちを、「やおい」ファンはファンタジーに近い形で成就させる。ファロスの獲得のようなところがあるんです。（野火 2003：288）

インタビュー後の解説で斎藤環は、「欲望の主体となって男性に復讐することは、フロイトが指摘したペニス羨望の構造そのものである」と書いている（同前：318）。今、ペニス羨望に「男性への復讐」の意図があるかどうかは置くとして、女性の変身願望とそこに見出される男性化への意志が「ペニス羨望」の理論と関連づけられていることは興味深い。

「ペニス羨望」とは、フロイトが「欲動転換、とくに肛門愛の欲動転換について」（1917）の中で明らかにした概念で、一般に次のように説明される。

「ペニス羨望」は、少年のようにペニスを所有したいという女性の欲望を意味するのみならず、ペニスのさまざまな化身への欲望をもさしている。子供を欲すること、これはペニス－子供という象徴的等価性によるのであり、また「ペニスの付属物」としての男性を欲するのもそれである。」（ラプランシュ他『精神分析用語辞典』1977：416）

要は、女性はペニスを持たないので、男子が持つペニスを欲し、それは象徴的には子供と同等視される、と言うのである。精神分析の専門家でもなければ、にわかには信じがたい理論である。無意識のレベルの話であったとしても、そもそも女性は器官としてのペニスを持ちたいなどと思っているのであろうか。それが、引いては子供と等価のものであるというのだから、フェミニストの間に激しい非難を引き起こしたのも仕方のない話である[6]。

しかし、この説が含意する「女性には男子のようになりたいという欲望がある」という考え方は、BL ジャンルのエロスを形成している一方の欲望であると言える。西村マリは、「BL ならではの魅力の第一は、男を犯す立場に立てることだ」として、次のように述べる。

女性達はヤオイを通じて“欲望の視線で捉えた受動的な男”を発見してしまった。この点に触れずには、女性にヤオイがもてはやされる意味が見えてこない。
　男を犯す！　ヤオイの魅力はこれにつきる。（西村 2015：189）

「ペニスを所有したい」という欲望は、実は「ペニスという器官をもちたいという欲望」なのではなくて、「ペニスを持った存在として振舞いたい」という欲望なのではないだろうか。野火の発言の中にあった「ファロス」（＝ファルス）が、ペニスを「象徴的な意味で」用いる際に使用される語であることを知るなら（福原 1998：344）、女性たちが求めているのは「ファルス」のことで、そうした欲望を「ファルス願望」と呼ぶことも許されよう。実際、ラカンは先に引いた「ファルスの意味作用」の中で、次のように述べている。

女性は、ファルスとなるため、言い換えるなら〈大文字の他者〉の欲望のシニフィアンとなるためなら、女性性の本質的な部分、とりわけ仮装における装飾物をすべて捨て去るであろう。（Lacan 1966：694）

この発言は、一見、ファルスとなるためには、装飾物が邪魔なので捨て去られると主張しているように思われるが、注目すべきは、両者が等価なものとして捉えられていることである。すなわち、ファルスと装飾物は同時には共存不可能なので、ファルス（＝ペニス）となることができない女性たちは、その代替として装飾物を身につけているのだとみなすことができる。装飾物が仮装のための不可欠の要素であることを知るなら、女性達の変身願望の根源には、ファルス願望が潜んでいるということになる。

## 4. ファルスとエディプス・コンプレックス

上の引用で、さらに注目しなければならないことは、「ファルスとなること」が、「〈大文字の他者〉の欲望のシニフィアンとなること」と言い換えられていることである。〈大文字の他者〉とは、ラカンの精神分析において、「父の名」または「法の場」を意味する言葉で[7]、その欲望の「シニフィアン（＝記号表現）となる」ということは、女性達はファルス願望を通して、法としての〈父〉となることを望んでいるということになる。ラカンは、同じ論文の中で、

> ファルスとは、［主体がシニフィアンと関係をもつ際の］目印となる特権的なシニフィアンのことであり、そこでは言葉（ロゴス）の役割が欲望の到来と結合する。（Lacan 1966：692）

と述べ、ファルスが「言葉の役割」と「欲望 désir」が結びつく「場」（原文では、où）であるという。「言葉 logos」が「父の名」に保証された〈象徴界 le symbolique〉の別名であることを知るなら[8]、ファルス願望とは、エディプス･コンプレックスのいう〈父〉＝法となって、〈父〉＝男のように振舞いたいという欲望（désir）のことであると言ってよいのではないだろうか。そして、女児の「ファルスを持ちたい」という欲望は、〈父〉＝法の登場以前には想定できないことなのだから、女性特有の「変身願望」も「ファルス願望」もそもそもの原因は、母の所有と独占に端を発したものであると言えるだろう。

エディプス・コンプレックスは、専門家の間では否定さるべくもない理論かもしれないが、その内容を全面的に受け入れるには、いささか躊躇がある[9]。一般的な説明を引けば、男児は、「自らを母の欲望の対象とし、母をわがものとしたい気持ちから、父をライバルと考えるようになる」というのだが、「女児は、失われた男根をめぐりその欲望を父に向けるようになっていく」（今村 1988：92）と言われると、無意識のレベルの話であるとはいえ、女の子が本当にそんな欲望を父に対して感じているのだろうかと思ってしまう。

ただ、子供の性別にかかわらず、去勢以前、すなわち幼児と母親との関係への〈父〉の登場以前の「母親への強い執着＝愛の希求」は、誰しも認めるところではないだろうか。これを根拠として、息子が父親をライバル視する傾向にあり、男子が往々にして「戦い」を好む性であることは、わかりやすい議論である。しかし、他方ペニスがないことを知った娘は、「愛情の対象を母親から父親に移す」としたエレクトラ・コンプレックスに至っては、にわかには信じがたい。ユングの説よりは、女の子も母への愛情断ち切りがたく、自らが「父」となって（＝父に仮装して）、母との関係を維持し続けようとすると考えた方がより自然ではないだろうか。こうした「母の希求」こそが女性における変身願望の源泉にあるように思われる。

エディプス理論は、女児はペニスを与えてくれなかった母親を憎むようになると言うが、はたして娘はそれほど簡単に母との絆を断念することなどできるのだろうか。そして、そもそも「男子が母を愛の対象としたのと同様に父を性愛の対象に」などできるのであろうか。ここには、男子と女子で母親に対する「愛」において大きな乖離があるように思える。

## 5. 女子の「愛」と前エディプス期

女性が変身によって求めているものが、〈父〉の登場以前の「母の存在」であるとするなら、そのことから、BL マンガの読者たちが、このジャンルに求めている愛の形が見えてくる。

〈父〉＝ファルスへの変身願望は、一見、ヘテロの愛の完成を予想させて、一件落着となりそうなのだが、女児がいくら「男」に化けたとしても、それは所詮仮の姿（＝仮装）でしかない。しかし、彼女にあきらめる必要などない。彼女が目指していたのは、母の所有がもたらす「性的な快楽」ではなく、対象としての「母」なのだから。

精神分析学では、〈父〉の登場以前の、母と子が原初的な関係にある時期のことを前エディプス期と呼ぶが、この期の母子関係を扱う対象関係論では、〈父〉の存在は後退し、「幼児は誕生の時から〈諸対象〉との発達的な関係に従事している」と仮定される（ライト 2002：242）。リビドーを「快楽の希求」ではなく「対象の希求」とみなした W・R・D・フェアベーンは、

> リビドー論の説明体系としての大きな限界は、単に自我が対象関係を統御するための技法に過ぎないと考えられるようなさまざまな現象を、リビドー的態度を示すものと理解しているというところにある（フェアベーン 2017：44）

として、「リビドーの究極的な目標は対象である」（同：45）とした。この見解は後年、リビドーの実体化を避けるために、「人はリビドー的である」という表現に修正されるが（栗原 2017：367）、「子が母を求める」点においては、フロイトのリビドー論と異なるところはない。ただ、前者がその希求の目標を、母親と結びつくことによって得られる「快楽」であるとするのに対して、後者は「母親そのもの」＝対象であるとしている点が違っている。言い換えれば、両者の違いは、〈父〉の登場以前の幼児が性的な体制下にあるとみなすかどうかにあると言ってよいだろう。

フロイトに拠れば、前エディプス期においても、父親は「少女にとっては厄介な競争相手」として捉えられており（フロイト 1969：140）[10]、あくまでも母と子の関係は性的な体制の下にあるとされる[11]。これに対し、フェアベーンの対象関係論は、前エディプス期の幼児が求める「自然な部分対象と言うのは、ただ一つ、母親の乳房でしかないし、全体対象の中でも最も意味のあるものは母親でしかない」と言う（フェアベーン 2017：54）[12]。そして、「心理学的な意味では、対象との同一化と幼児的依存とは、同じ現象の 2 つの側面に過ぎない」（同：55）のだから、「同一化している対象は、合体された対象と同じだ」ということになり、「対象の中に合体されている、その対象が、その人の中に合体されている」ということになる（同：56）。

こうした、対象関係論が描き出す母と子との関係こそ女性たちが BL ジャンルに求めている愛の形ではないのだろうか。すなわち、母が私で私が母であったように[13]、私は〈受け〉であると同時に〈攻め〉であり、私がパートナーに求める愛は、性的な所有による愛の完遂などではなく、私が昔母とともにあったときに感じていた「融合の愛」なのである。

美少年ものや BL の女性読者は、この愛を得ようと（＝母の所有）男となることを望むが、父の「性」を仮にまとった彼女にヘテロの愛の成就など望むべくもない。彼女が母との間で得ることができる愛は、そして、彼女たちが本当に手に入れたかったのは、性が分化する以前の「性を欠いた愛」だったのである。上野千鶴子は、「美少年マンガは、[男でも女でもない] もう一つの性を創造した」と言ったが、これは次のように理解されなければならない。すなわち、BL ジャンル＝美少年マンガは、新しい性を創造したのではなく、「性のない愛」＝〈非性の物語〉をファルス願望を通して実現したのだ、と。そして、その際、この「非性」性を確保するために、愛のパートナーは、仮装した読者（＝女性）と「同じ性」でなければならなかったのである。従って、BL ジャンルに描かれる同性愛の物語は、≪ homosexual ≫なものではあるが、決して≪ queer ≫なものではないのである[14]。しかし、だからと言って、レズビアンが許されるわけではない。ファルス願望と母の希求故に BL ジャンルの物語は、どうしても男性同性愛の物語でなければならなかったのである。

以上の議論から、なぜ少年マンガや男性向け成人マンガが、ホモセクシュアルはもちろんのことレズビアンでさえ主要な題材としないのかということにも説明がつきそうな気がする。もちろん女性を対象とした TL（ティーンズラブ）やレディースコミックでは、ヘテロ間の「ハードな」性行為が描かれるが、こうした女性向けポルノが描こうとしているのは、男性向けポルノコミックが目的とする「性欲の成就」ではなく、カップル間の〈絆〉であり〈関係性〉であることから[15]、私たちの結論と何ら矛盾するものではないことを最後に付け加えておきたい。

## 注

1）西村マリによれば、1992 年が「実質的な BL ジャンル確立の年」とされる（西村 2015：36）。

2）「日本の BL ものは、性別隔離文化が産んだ女性の性幻想の特異な領域であり、そういうものとして世界に誇るべき文化的達成である」（上野 2007：35）。ただ、欧米にも〈カーク船長／ミスター・スポック〉や〈シャーロック・ホームズ／ワトソン博士〉を借用した「スラッシュ小説」（スラッシュとは、二人の男の名をあげるときの仕切り線 “ ／ ” のこと）は存在していた（サーモン－サイモンズ 2004：9）。アメリカでの BL 受容については、椎名（2007：180-189）を参照。

3）少年マンガでは間白が厳密に順守されるのに対して、少女マンガではそもそも間白は無視される傾向にあり、コマとコマの境界が明確でない上に、区切られる場合にも、実線が使われる傾向が強い。

4）少女マンガの構成については、たとえば、『マンガはなぜ面白いのか』の第 11 章「少女マンガのコマ構成」（夏目 1997：154-167）参照。

5）変身シーンの性差は、単に子供レベルの話かもしれないが、成人女性が化粧に時間をかけ、男性よりも多くの衣装やバッグ、装身具を持つ傾向があることは、仮装＝変身を楽しむ

ことと関係しているように思われる。〈アイデンティティを次々に変化させること〉にこそ女性性の本質があるのではないだろうか。

6）「1970 年代初頭の英米のフェミニズムによって、最初のうちフロイトと精神分析が拒絶された決定的な要因は、女性のペニス羨望の理論であった。」（ライト『フェミニズムと精神分析事典』2005：380）

7）ラカン派の『精神分析事典』（シェママ他 2002）に拠れば、「父の名」とは、「シニフィアンの場としての大文字の他者のなかで、法の場としての大文字の他者のシニフィアンであるシニフィアン」である。（同辞典「大文字の他者」の項：51）

8）「ラカンは、象徴界の法は「象徴的な父」「父の名」によって守られていると言っているが、これは言語による去勢を課し、法という理念的な要件を表すものを示す隠喩である。」（ライト『ラカンとポストフェミニズム』2005：90）

9）「眉唾ものの「息子（エディプス）の物語」であるフロイトの理論」（上野 1989：244）。

10）「［フロイトは］母親との関係が主たる時でも、父が「好まれざる競争者」として存在していることに注目している。」（『精神分析用語辞典』1977：282）

11）「エディプスが完遂されなくても十分な性器活動にいたることもあり、エディプス葛藤が前性器期の性として十分に活躍することもある。」（同前）

12）フェアベーンは、幼児的依存の時期を（1）早期口愛期と（2）後期口愛期に分け、前者では母親の乳房が部分対象となり、後者では、乳房を持った母親の全体対象が部分対象として扱われるとしているが、我々の議論では、（1）においても（2）においても、母親＝対象としている。

13）藤本由香里は、少女マンガが「分身＝双子の物語」を好むことを指摘しているが、それはこうした愛の希求に原因があると考えられる。（藤本 2001：68-131）

14）佐藤雅樹は、「80 年代末から 90 年代初頭かけて」の、少女マンガをも含んだ「女たちのゲイ・ブーム」について、次のように書いている。
「そこでイメージされる姿は、現実の同性愛者とは全く異なるものである。それらは、あくまで異性愛者の女たちの性的ファンタジーに都合よく捏造された姿なのだ。」（佐藤 1996：161）

15）堀は、〈性的表現を含む女性向けコミック〉が同性愛カップルの〈関係性〉を重視する志向があることを指摘しているし、サーモン＆サイモンは、スラッシュ小説についてではあるが、詳しい性描写があるにもかかわらず、「強調されるのはいつも、肉体的な感覚というよりは感情的な質」であると言う（サーモン－サイモン 2004：129）。

## 引用・参考文献

＊論文、原書の初出年度は（　）で示した。

R・シェママ、B・ヴァンデルメルシュ編『精神分析事典』新版（1998）、弘文堂、2002 年。

Mary Ann Doane,《Film and the Masquerade : Theorising the Female Spectator》in *Femmes fatales*,

Routledge, 1991.

W・R・D・フェアベーン「人格におけるスキゾイド的要因」（1940）「精神病と精神神経症をめぐる精神病理学の改定」（1941）『対象関係の源流』、遠海書房、2017 年。

ブルース・フィンク『後期ラカン入門　ラカン的主体について』（1995）、人文書院、2013 年。

藤本由香里「女の両性具有、男の半陰陽」（1990）『私の居場所はどこにあるの？　少女マンガが映す心のかたち』、朝日文庫、2008 年。

『快楽電流　女の、欲望の、かたち』、河出書房新社、1999 年。

「分身 —— 少女マンガの中の「もう一人の私」」『マンガの社会学』（宮原浩二郎＆荻野昌弘編）、世界思想社、2001 年。

福原泰平『ラカン　鏡像段階』、講談社、1998 年。

S・フロイト「欲動転換、とくに肛門愛の欲動転換について」（1917）、「女性の性愛について」（1931）『フロイト著作集』第 5 巻、人文書院、1969 年。

堀あきこ『欲望のコード　マンガにみるセクシュアリティの男女差』、臨川書店、2009 年。

今村仁司編『現代思想を読む事典』、講談社現代新書、1988 年。

リュス・イリガライ『ひとつではない女の性』（1977）、勁草書房、1987 年。

『性的差異のエチカ』（1984）、産業図書、1986 年。

石田美紀『密やかな教育〈やおい・ボーイズラブ〉前史』、洛北出版、2008 年。

栗原和彦「解題 —— Fairbairn 理論の臨床的意義についての一考察」『対象関係の源流』、遠海書房、2017 年。

Jacque Lacan,《La Signification du Phallus》（1958）in *Ecrit*, Seuil, 1966.

「神と女性の快楽」（1976）『現代思想』1985 年 1 月号、青土社。

J・ラプランシュ＆ J- B・ポンタリス編『精神分析用語辞典』（1967）、みすず書房、1977 年

溝口彰子『BL 進化論　ボーイズラブが社会を動かす』、太田出版、2015 年。

守如子『女はポルノを読む　女性の性欲とフェミニズム』、青弓社、2010 年。

妙木浩之『エディプス・コンプレックス論争』、講談社選書メチエ、2002 年。

永久保陽子『やおい小説論　女性のためのエロス表現』、専修大学出版局、2005 年。

J・D・ナシオ『精神分析 7 つのキーワード』（1988）、新曜社、1990 年。

夏目房之介『マンガはなぜ面白いのか　その表現と方法』、NHK 出版、1997 年。

西川直子『クリステヴァ　ポリロゴス』、講談社、1999 年。

西村マリ『BL カルチャー論　ボーイズラブがわかる本』、青弓社、2015 年。

野火ノビタ『大人は判ってくれない　野火ノビタ批評集成』、日本評論社、2003 年。

押山美知子『少女マンガ ジェンダー表象論〈男装の少女〉の造形とアイデンティティ』、彩流社、2007 年。

クィア・スタディーズ編集員会編『クィア・スタディーズ '96』、七つ森書館、1996 年。

ジャン - ミシェル・キノドス『フロイトを読む』（2004）、岩崎学術出版社、2013 年。

佐藤雅樹「少女マンガとホモフォビア」『クィア・スタディーズ '96　クィア・ジェネレーションの誕生！』、七つ森書館、1996 年。

キャサリン・サーモン＆ドナルド・サイモンズ『女だけが楽しむ「ポルノ」の秘密』（1998）、新潮社、2004 年。

椎名ゆかり「アメリカでの BL マンガ人気」『ユリイカ』2007 年 12 月臨時増刊号、青土社。

新宮一成＆立木康介『フロイト＝ラカン』、講談社選書メチエ、2005 年。

竹宮和子『愛について』、岩波書店、2002 年。

上野千鶴子「ジェンダーレス・ワールドの〈愛〉の実験」（1989）『発情装置』、筑摩書房、1998 年。

『発情装置』新版、岩波現代文庫、2015 年。

エリザベス・ライト『ラカンとポストフェミニズム』（2000）、岩波書店、2005 年。

『フェミニズムと精神分析事典』（ライト編、1992）、多賀出版、2002 年。

山岡重行『腐女子の心理学　彼女たちはなぜ BL（男性同性愛）を好むのか』、福村出版、2016 年。

山田田鶴子『少女マンガにおけるホモセクシュアリティ』、ワイズ出版、2007 年。

『ユリイカ』2007 年 6 月臨時増刊号「腐女子マンガ体系」、青土社。

2007 年 12 月臨時増刊号「BL スタディーズ」、青土社。

2012 年 12 月号「BL オン・ザ・ラン」、青土社。

2013 年 7 月号「女子とエロ・小説編」、青土社。

ヨコタ村上孝之『マンガは欲望する』、筑摩書房、2006 年。

（受付日 : 2018. 12. 10）